

# 「気遣い」をめぐるディスコース —— 男女間のフットイングとフレーム交渉の事例分析 ——

Discourse on *Kizukai*:

A Case Study of Footing and Framing Negotiations between Male and Female Participants

瀬端 睦

Mutsumi SEBATA

**Abstract:** *Kizukai* is one of the most important elements of communication in Japan today. Academic research on this topic has been limited, and studies conducted by Japanese researchers are particularly scarce. One reason for this is that *kizukai* is taken for granted as an everyday matter that is not worthy of study. In fact, most aspects of everyday life are poorly understood, and *kizukai* is one of them. This study is based on my 2007 research and aims to explore the ideological aspects of *kizukai* by analyzing a discourse on *kizukai* that took place at a party between a man, a woman, and a female researcher.

This study scrutinizes the conversation at the party and reveals that *kizukai* can make significant contributions to the construction of relationships in the discourse. One observation is that the man's commentary relates *kizukai* to femininity, and makes a significant impact on the development of relationships (footing) among the three participants. The male participant poses the question of whether one can practice *kizukai* while relating it to the evaluation of whether one is a woman and whether that woman can be a potential love interest. He tries to direct their footing and change the framing of their conversation by using the sentence-final particle “ne,” the deixis “ore-ra,” and the diminutive suffixal title “-chan.” Meanwhile, the female participant resists adopting his footing and attempts a new framing. These negotiations between the male and female reveal a process of how an asymmetrical relation is constructed between *kizukai* and gender through discourse.

## 1. はじめに

気遣いは、現在、円滑なコミュニケーションのための重要な要素だとみなされている。そのことは、『日本人にしかできない「気づかい」の習慣』（上田，2011）や『誰といても疲れない「気づかい」のコツ』（水島，2012）などのマナー本が、毎月のように出版されていることから窺い知ることができる。しかしながら、実際には、日本社会における気遣いの実態に関する学問的探究は、ほとんどなされていない。そして、気遣いとジェンダー<sup>1</sup>の関係も、これまでほとんど指摘されてこなかった。わずかながら、Borovoy (2003) や Rosenberger (1992, 1994) 等の外国人研究者によって、以下のような指摘がいくつかなされているのみである。

Indeed, there is a rich lexicon in Japanese to describe this quality of attentiveness. The idea is captured in a number of Japanese expressions that describe alertness (literally, the way one holds one's *ki*, or "animating spirit") as a social virtue: *kizuku* (*ki* is ignited, connoting "noticing" and awareness), *ki o tsukau* (use one's *ki*), *kimawashi* (to circulate one's *ki*), and *kikubari* (to hand out one's *ki*) all describe the importance of being attentive to the needs of others in a preemptive way. A person who is inattentive to others, whose *ki* does not ignite (*ki ga kikanai*), is seen as oblivious, lazy, or unreliable. For a woman, this is unforgivable. (Borovoy, 2003, p.98)<sup>2</sup>

本稿は、以上で指摘されているような、気遣いとジェンダーの関係を、ミクロな相互行為の分析から明らかにすることを目的とする<sup>3</sup>。「気遣いの定義は何か」という問題がよく指摘されるが、本稿は、気遣いの意味（文化的意味範疇：のちに詳述）や定義がどのようにして、ジェンダーとの関係において構築されていくのか、そのプロセスを、ミクロな相互行為のフットイングやフレームの推移から探究しようとするものである。裏を返せば、それは「女」というカテゴリーが、権力構造によって、どのように生産され、また制約されているか（バトラー，1999，p.21）、そのことに気遣いがいかに関係しているかを探究するということにもなる。具体的には、食事場面のデータに着目し、実際の相互行為において、気遣いとジェンダーとの関係がどのように構築されているか、そして、それが、人間関係の構築、変容にどのように寄与しているかを分析する。

まず、本稿が探究の対象とする「気遣い」に関して、確認しておきたい。日常のなかで、人びとは「Aさんは気遣いができる」「Bさんは気遣いができない」といった発話を行う。本稿が考察の対象とするのは、AさんやBさんは本当に気遣いができるのか、あるいは、できないのか、ということではなく、また、AさんやBさんがどのように気遣いをしているのか、あるいはしていないのかということでもなく、むしろ「Aさんは気遣いができる」や「Bさんは気遣いができない」という発話がどのような経緯で行われ、その発話が行われることによって、その会話の参加者に何が起こり、そこで実際に何がなされているのかということである。すなわち、「気遣い」に関する発話において、言われていること（言及指示的意味）と、なされていること（社会指標的意味<sup>4</sup>)を明らかにすることである。

そのような視点で探究するのは、人びとが気遣いに関して意識化し、行っていること、そして、無意識に行っていることを明らかにするためである。人びとは自分たちが行っていることを意識的に完全に把握することはできず、ある種の「歪み」をともなって認識する。音に関して言えば、そうした歪みをともなって把握されるものが、物理的音声とは区別される、範疇的な認識下にあ

る音素である（小山，2011；Kroskrity，2000；Silverstein，2001）。それは、気遣いに関しても同様であり、前述したように、気遣いとジェンダーとの連関に関する指摘は、外国人研究者によってのみなされている<sup>5</sup>。気遣いに関して「日本人<sup>6</sup>」とそうではない人びととのあいだに（研究者の中でも）、異なった認識の傾向がみられるということには、音素のような歪み、すなわち、気遣いに関して人びとが意識化していること（イデオロギー）、そして、それにもとづいて行われる無意識的な行為が関係していると考えられる。本稿は、そのようにして、人びとが気遣いに関して意識化し、行っていること、また、気遣いに関して無意識に行っていることを、人びとが気遣いをめぐって語る行為（ディスコース）に着目することで、明らかにしようとするものである。分析の際には、相互行為分析の枠組み、すなわち、ゴフマンの「フットィング」と「フレーム」の概念を主に用い、それらの推移や交渉から気遣いとジェンダーとの関係性の構築や人間関係の構築のプロセスを見ていく。以下では、まず、ゴフマンのフットィングとフレームの概念を確認し、その後、実際の相互行為の分析を行う。

## 2. ジェンダーと人間関係の構築：フットィングとフレーム

人びとのジェンダー、すなわち、「女であること」や「男であること」「ゲイであること」「レズビアンであること」は、日々の行為のなかで、つねに前景化されているわけではない。たとえば、エレベータに誰かが乗ってきた場合に、通常であれば、人は瞬時にその人が女性なのか男性なのか、無意識のうちに判断しているだろう。しかし、もし、非常に背が高く、筋肉隆々で、「男性らしい」体つきをしているのに、ミニスカートををはいて、ハイヒールを履いている人がエレベータに乗ってきたとすれば、人は多かれ少なかれ混乱に陥ることになる。その場面においては、見た目から看取されるジェンダーに、相反するものが含まれていることで、特殊なコンテクストが喚起され、特殊な相互行為が起きたことによって、その人のジェンダーが問題化され、意識化され、前景化されたのである。そのようにして、「女であること」や「男であること」などのジェンダーは、ある特定のコンテクスト、特定の相互行為によって、意識化され、前景化されるものである。

ゴフマン（Goffman, 1981）は、ニクソン大統領が法案に署名するセレモニーで起きた出来事の分析を行い、そのことを示している。そのセレモニーでは、ニクソン大統領が女性記者の服装を冷やかすことによって、仕事における「記者」としてではなく、容姿を評価される「女性」としてのフットィング（footing）に変化させていた。女性記者は権力をもっている大統領から、記者としてではなく、女性としてのフットィングを取らされることによって、彼女のジェンダーが前景化されることになったのである。そして、それは同時に公式な式典というフレームから、括弧でくくられた（bracketing）ジョークという非公式なフレームへと移行がなされたことをも意味している。

フットィングとフレームに関して、ゴフマンは以下のように述べている。

A change in footing implies a change in the alignment we take up to ourselves and the others present as expressed in the way we manage the production or reception of an utterance. A change in our footing is another way of talking about a change in our frame for events. (Goffman, 1981, p.128)

フレームとは、相互行為の参加者が出来事に与える解釈であり、フットィングが変われば、フレームも変わる。人びとは刻々と変化していく出来事のなかで、さまざまにフレーム付けを行ったり (framing)、フレームを壊したり (breaking frame) しており、出来事の解釈やコンテキストを変容させていく (Goffman, 1986)。このように、コンテキストというのは、出来事を取り巻いている静的な状況のことではなく、動的に刻々と変化していくものである (Goodwin & Duranti, 1992)。

以上に述べたようなかたちで、「フットィング」と「フレーム」、「コンテキスト」は相互行為において、密接に関連しているものであり、したがって、相互行為の分析を行う際には、そのコンテキストやフレーム、フットィングなどの変容をも分析していく必要がある。以下では、食事場面における相互行為に着目し、フレーム、フットィング、コンテキストが気遣いとの関係において、どのように変容し、参加者の人間関係やジェンダーを構築してゆくのかを分析していく。それは、言い換えれば、シルヴァスティン (2011, pp.299-300) が「互いの関係づけの時間の推移にともなう動き、および、社会的営為の世界において指標されるこれら関係づけの含意や帰結、こうした相互行為の構造が、相互行為参加者たちのあいだに現れる」ものだとする「相互行為のテキスト (interactional text)」を探究していくということである。

### 3. 食事場面における「気遣い」をめぐる出来事

本章では、フットィングやフレームの交渉が参加者間でどのようになされているか、そして、それがどのように気遣いと結びついているかを、食事場面で行われた相互行為に着目して、分析していく。本稿で分析の対象とする相互行為は、女性1名 (F: 愛称ザラ (仮称)) と男性1名 (M: 愛称ヤマツ (仮称))、そして、女性調査者1名<sup>7</sup> (R: 愛称リン (仮称))、計3名が参加した食事会の様子を収録したもの (2007年) である。FとMは高校の同級生、FとRは大学の友人、MとRは初対面である。出来事の流れに沿って変化する参加者のフットィングとフレームに関して、1) 対照ペア、2) 直示、3) 終助詞「ね」、4) 呼称に着目して、分析する。以上の4点に着目して、時系列にやりとりを分析していくのは、それらが相互行為における人間関係の構築に大きく寄与すると考えられているからである (それらがどのように人間関係の構築に寄与するかは、各節の分析箇所ですべて詳説する)。

#### (1) 出来事①: 対照ペア (文化的意味範疇)

MとFは出身地が同じであるため、二人は同じ電車に乗って、食事会の場所にやってきたが、車内での二人の会話でも、食事会が始まってからも、MがFに「自分と似ている」という趣旨の発話を行っていることがやりとりのなかで明らかとなる。二人は「人気者」だという点で似ているということに関して、たとえば、つぎのようなやりとりがなされている。

[抜粋①]

- 1 M : 俺に対してはどなの?
- 2 F : いや、んーいいじゃん、人気者だから、人気者はそこがあれだよ。
- 3       それが [代償、人気者の代償だよ
- 4 M :       [自分だって人気者じゃん、自分だって人気者じゃん
- 5 F : 人気者のね、理由はね、あ、理由じゃなくて、その、定義は、

- 6 R : うん  
 7 F : 誰にも好かれるんだが  
 8 R : うん  
 9 F : 異性にはこう恋愛対象にはならないっていうのを、さっち ((仮称；友人のニックネーム)), すごい  
 10 R : @@@<sup>8</sup>  
 11 F : 断言してたよ  
 12 R : うん, ありがち  
 13 F : そのね, だから私のこと人気者っていうのはつまり, お前はもうちょっと  
 14 恋愛対象になってないということをさっきから何回も何回も連呼してるということ  
 15 R : @@@@  
 16 M : でも人気者でうれしいでしょ?  
 17 F : いやー, あんまり, まあでも最近だからね, 人気者になったのも

このやりとりを分析するに際して、まず、言及指示的意味について確認しておきたい。言及指示的意味には、文法的意味と非文法的意味が関わる (小山, 2012)。文法的意味とは、文法にコード化された意味であり、「I」であれば、「一人称代名詞」、「単数」などが文法的意味になる。英語の文法において、「I」は必ず一人の話し手を意味するのであり、聞き手や複数の人を意味することはありえない。そのようにコンテキストに関係なく、文法によって規定されている比較的安定した意味が文法的意味である。一方、非文法的意味とは、文法にはコード化されていない意味であり、「文化的意味範疇」と呼ばれる (哲学では「概念」、言語人類学では「文化的ステレオタイプ」と呼ばれる) ものである。たとえば、「水」ということばを化学者が使用した場合には、「H<sub>2</sub>O」の意味になり、アスリートが用いた場合には「渴きを癒す透明な液体」の意味になり、汚れた水しか水道から出ない地域で育った人が用いた場合には「茶色っぽい液体」という意味になったりする。このように、同じ文法を用いていても、コンテキストによって、使用者が言及指示対象に抱くイメージが異なるもの、それが文化的意味範疇である。文法的にコード化された意味が言及指示的意味と結びつくのに対して、文化的意味範疇は、「化学者」や「アスリート」などの職業や生活経験、すなわち、社会的範疇に関わるので、言及指示的意味に加えて、社会指標的意味にも結びつくものである。つまり、どのような文化的意味範疇でそのことばを用いるかによって、その人の職業などの属性や生活経験が示されることにもなるということである。

以上のやりとりにおいては、「人気者」と「恋愛<sup>9</sup>対象」が対照ペア (contrastive pair)<sup>10</sup>として用いられており、「人気者」の文化的意味範疇は「恋愛対象にはならない」ということだと明確に定義されている。文化的意味範疇は、上述のように、同じ文法を用いていても、コンテキストによって、使用者が抱くイメージが異なる、非文法的意味なので、コンテキストによっては、人気者の文化的意味範疇が上記以外になることも当然ありうる。たとえば、「人気者って大変だよな。誰からも好かれちゃって」などといった発話においては、人気者の文化的意味範疇は、「誰からも好かれる人」という上記とは異なったものになるはずである。しかし、ここでは、恋愛対象と人気者が対照ペアとして反復して用いられており、MとFが「人気者＝異性の恋愛対象にはならない」という点で共通点があることが了解されている<sup>11</sup>。そして、同時に、人気者は恋愛対象にならないと考えるような人物として、自らを指し示しているということにもなる。それからしばらく経ち、以下のようなやりとりがなされる。

## (2) 出来事②：終助詞「ね」

[抜粋②]

18 M : ザラ親子丼あげた？

19 F : え, 食べたでしょ？

20 R : @@

21 M : ひっでー@@

22 R : @@

23 M : ひっでー

24 F : リンー [ほら

25 M : [俺, そうだと思ったんだよー [俺

26 F : [リンー@@ [@@@

27 R [@@@@

28 M : ザラねえ, あーごめんごめん. 気遣いのあれだよ ね? 気遣いでしょ? ねえ

このやりとり以前に、MとFはそれぞれ、きじ丼と親子丼を注文していた。Rは丼物は注文していなかったため、Mはきじ丼をRに取り分けたが、Fは「自分でやるからいい」として、Mの取り分けを断っていた。その後以上やりとりが行われ、21行目と23行目の「ひっでー」という発話により、親子丼を取り分けなかったFに対して、Mは気遣いができていないとして、批判を行っている。そして、28行目において、そのことに対する同意をRに求めている(28行目において、終助詞「ね」の発話の際、Mの視線はRに向けられており、Rに同意を求めていることがわかる)。

このやりとりが行われる前に、RはMとFに、旅行の土産を渡していた<sup>12</sup>。FもMもRが気遣いの研究をしていることは了解しており、また、Rの土産に対して、そういうことができる女性は素晴らしいという趣旨の発話をMが行っていることから、MはRを気遣いのエキスパートとみなし、ここで、気遣いに対する批判の判断をRに仰いでいると考えられる。

そのようにして、土産を渡したRときじ丼を取り分けたMに関しては、二人とも「気遣いができる人」として、一方、親子丼を取り分けなかったFに関しては、「気遣いができない人」としてのフットینگが指し示されている。そして、そのフットینگの指標は、28行目において、連帯感を生み出す終助詞「ね」をMがRに対して用いることで<sup>13</sup>、MとRの同一集団への帰属性が指し示されることにより、一層強化されている。日本語の助詞において、「ぞ」や「よ」「さ」などのほとんどの終助詞は話し手の心情や判断を典型的に示すemotive<sup>14</sup>なものであるのに対し、終助詞「ね」は、話し手の聞き手に対する配慮や話し手の思慮深さや洗練、優柔不断などを示すconativeなものである(Koyama, 1997, p.17)。Mが「ね」をRに向かって働きかけるものとして用いることにより、Rにフットینگを合わせる効果が働いている。加えて、「ね」は聞き手への配慮を示すので、MはRに対して配慮、すなわち気遣いを示していることになり、気遣いを示しているMと気遣いのエキスパートとされているRとのあいだの同一性がパフォーマンス(遂行的)に示されているともいえる。(終助詞「ね」の使用は、3.3～5節でもみられるものである)。そうした経緯を経て、つぎのようなやりとりへと至る。

(3) 出来事③：直示（ダイクシス, *deixis*)

[抜粋③]

- 29 M : おもしろいでしょ？  
 30 R : うん  
 31 M : ね。高校のときからこんな感じだよ  
 32 R : @@  
 33 F : なに？ [おままごと？  
 34 R : [なに？  
 35 F : なんつったの？今  
 36 R : おもしろ  
 37 F : その後. おここってゆったから  
 38 R : 高校の時から  
 39 F : あーあー  
 40 M : 通じ [てるよ 俺ら  
 41 R : [@@@@@ [@@@@@  
 42 F : [@@@@@どうしたの今？今じゃなくて昔からだけど  
 43 M : 俺が悪いんじゃないよね？ @@@ほら  
 44 F : [早口じゃない, なんか  
 45 R : [@@@  
 46 M : でも, 通じてるよ  
 47 F : 今日帰ったら耳掃除 [@@@  
 48 R : [@@@@@  
 49 M : なに, 俺, なに俺とザラ, なに, 俺とザラ, なんか, なんか電波障害？電波障害？

135

ここでは、40行目において、MとRを意思疎通ができて「俺ら」という一人称代名詞を用いて指し示すことで、MとRを同集団に属するものとし、Fを別集団に属するものとするというフットイングがさらに明確に指し示されている。

直示（ダイクシス）は、代名詞や時制、法（ムード）、様態（モダリティ）、あるいは、「今」「明日」などの語彙であり、コンテキストを参照することなしには、そのことばの指し示すものがわからないものである（小山, 2012, pp.67-70）。一人称代名詞もコンテキスト依存性が高い直示であり、コンテキストが異なれば、その言及指示対象がシフト（転換）する「転換子」(shifters)である。そして、一人称代名詞は、コンテキストを「透明に（直接的に）」指標することで、コミュニケーションの解釈にも寄与する (Silverstein, 1976)。すなわち、ここではMとRが一人称代名詞の「俺ら」で示されることにより、MとRを同一集団に属するものとするコンテキストが作り出されている。

また、一人称複数代名詞には、排他的用法と包含的用法の二つの用法がある (Silverstein, 1987)。包含的用法は話し手と聞き手を含む集団をさす用法であり、排他的用法は話し手を含むが、聞き手は含まない集団をさす用法である。前者はえてして、話し手と聞き手の親密さを高めるが、後者は話し手と聞き手を疎遠にする機能がある。ここでは、Mが聞き手であるFを含まないかたちで、一人称複数代名詞を用いることにより、Fを排除する効果が発揮されている。そ

うして、MとRを同一集団に属するものとして、Fを別集団に属するものとするフッティングがさらに強化されているのである。そして、最後の49行目では、「電波障害」ということばも用いられ、MとFとのあいだの距離の拡大が指し示されている<sup>15</sup>。

#### (4) 出来事④：呼称（～ちゃん）

その後、追加注文したトマトベーコン巻が運ばれてきて、以下のやりとりがなされる。

[抜粋④]

50 M : あーおなかいっぱいだ

51 R : あたしこれ（(トマトベーコン巻)）なんかもう

52 F : うん

53 M : 脂っこいでしょ？ちょっと [きついよ ね]. ちょっときついよ ね. うん

54 R : [ごちそうさまって感じ]

55 R : いる？

56 F : あーそう、じゃあ、[もらうわ]

57 M : [@@@@ [@@ @@@@@]

58 R : [@@@@@ @@@]

59 M : ザラちゃん

60 F : ん、なに？

61 M : ねえ、ね、ね、あのねえ飯にもさ、

62 飯にもここに 異性 というものがあるん [だからさ]

63 F : [@@@]

64 R : いーじゃん

65 M : 同@同性@@なんか 同性 同士のさ@@@

66 F : え、なに？なに？

67 R : よく食べるのはいいことですよ

68 F : なん、食べるのがいけないの？

69 M : いやいいんだけどさ、いいんだけどやっぱり、ほら、普通女の子って男の子の前ではさー、ちよっ

70 とおしとやかになったりみたいなの。あごめん ザラ に聞いたのが間違いだった。あは@@@@

71 F : いや、だ、食べちゃいけないの？

72 M : いやいいんだよ、食べて。[@@食べていいんだけどさ@@]

73 R : [@@@]

74 F : なに？みんななに？じゃ分かった。分かった。じゃあこれはさあ、じゃ話して。

75 ヤマツは今までどんな女性に会ってきたの？言ってごらん。

76 R : @@

77 F : たとえば？じゃあご飯で、食べる時 [はい、言ってごらん]

78 R : [これ一個しかないよ]

79 M : ザラ, ザラ みたいな人とは正反対の

Rからベーコン巻をもらってまでよく食べるFをMがたしなめている場面だが、ここでは59行目の「ザラちゃん」という呼称に着目する。トランスクリプトを精査すると、MのFに対する呼称は「ザラ」が通常であるが、「ザラちゃん」が用いられている箇所もある。59行目ののちのやりとりでは、Mの「女の子はふつう、男の子の前ではあまり食べない」という意見にFが反論し、Mは「ザラに聞いたのが間違いだった」として、「ザラ」という通常の呼称に戻している。

呼称には「～さん」「～さま」「～くん」「～ちゃん」などが考えられるが、そのなかで、「～ちゃん」は「指小辞 (diminutive)」である。指小辞は、名詞や形容詞などの前後に付いて、その事物の「小ささ」や「弱さ」「軽さ」などを指標するものである。英語では「-y」に代表され、「kitty」や「foxy」などの表現で用いられ、日本語では「コ」に代表され、「小金持」「小ぎれい」などの表現で用いられているものである。犬を「わんちゃん」と呼んだり、関西で飴を「飴ちゃん」と呼んだりする例に示されているように、「～ちゃん」は、「かわいさ」「小ささ」「子どもっぽさ」などを指標する指小辞 (diminutive) であり、そのことが、「～ちゃん」が女性に対する呼称として用いられやすいことにもつながっていると考えられる。

以上のやりとりでは、「ザラ」とは対照的な「ザラちゃん」がFに対して用いられることによって、Fの小ささ、弱さ、かわいさ、女性性などが指標され、それがコンテキスト化の合図 (contextualization cue; Gumperz, 1982) となって、フットィングが変化し、ジェンダーに焦点化されたフレーム、すなわち、同性や異性の話題に焦点化されたフレームへと移行していると考えられる。しかし、77行目では、そのフットィングを撤回し、通常の呼称である「ザラ」に戻し、Fの女性性を否定している。そうして、Mは69行目では、自らを人気者ではなく、男である「異性」として指し示す行為に至る。

前述のように、MはRが気遣いの研究を行っていることを了解している。そして、Mの発話において、女性は男性よりも食べないようにするのが普通であるという文化的ステレオタイプ (文化的意味範疇) が表明されている。「女」や「男」ということばに関しても、その文化的意味範疇はコンテキストによって、さまざまに異なってくる。「女のくせに」と言われる場合の「女」は「劣った存在」という意味にもなりうるし、「お前なんか女じゃない」と言われる場合の「女」は「淑女」や「性的対象」などのさまざまな意味になりうる (千田, 2009, p.v)。以上のやりとりでは、「女性=あまり食べない」という文化的ステレオタイプにもとづくMが、Mの「おなかいっぱいだ」という発話に沿った51行目のRの発話を受けて、これまでのやりとりに引き続き、再び、連帯感を生み出す終助詞「ね」を使用することで、「女性=あまり食べない=R」という等式をMとRが共有していることを確認している。

そのことによって、MはRに女性としてのフットィングを取らせようとする行為を行っていると考えられる。抜粋①のなかで、人気者=恋愛対象にはならない、という文化的意味範疇が示されていたが、Mにとって、「女」の文化的意味範疇は、イコール「恋愛対象になること」であると考えられる。そのような女性としてのフットィングをとらせようとする行為が行われていることを、食事会全体へと広げれば、MはRを気遣いのエキスパートとしてみなし、それを女性は気遣いができるものだというステレオタイプと結びつけることで、「R=気遣いができる=女性」という等式を成立させ、Rに女性としてのフットィングをとらせようとする行為に従事しているということになるだろう。

一方で、Mは、抜粋②で、Fが親子丼を取り分けなかったこと、抜粋④で、Rの分の食べ物をもらってまでよく食べることを指摘することで、「よく食べる、気遣いできない=F=女性で

はない」という等式を成立させ、また、「これまでどんな女性に会ってきたの?」という質問に対し、「Fみたいな人とは正反対の」と述べることで、Fを女性ではない「人気者」としてのフッティングをとらせようとする行為を行っている。まとめれば、以上で見てきた食事場面のやりとりにおいて、MはRには女性としてフッティングをとらせようとする一方で、Fには女性ではなく、恋愛対象にはならない人気者としてのフッティングをとらせようとする行為に従事しているということになる。そのことは、抜粋③の29行目において、MがFを「面白い」<sup>16</sup>と評している（その後のやりとりでも、吉本興行に入れるほどに面白く、「サイコー」に面白いと褒めている）ことからわかる。MはFに笑いはとれるが異性はとれない人気者としてのフッティングをとらせようとしているのである。

### (5) 出来事⑤：対抗

Fは、一方で、そのようなMのフレーム付けに対抗する行為をなしていく。

- 80 F : うん. さっきすごいでも, きも気持ち悪かった時があったく VOX >はいー, 食べまく / VOX >ってやった時
- 81 M : だ-それはさー気使って, ねえ? ひどいよ ねー
- 82 F : < VOX > 気を使っく / VOX >
- 83 M : ザラなんてさー ねえ, 親@子@井 [@@一人で食っちゃってさ@@@]
- 84 R : [@@@@@]
- 85 M : どこ@どこが気遣いなんだよ
- 86 F : だって, だって知らなかったもん
- 87 M : だからーふつう ね. そ, そういの ね, 見るよ ね. 見て, ね. あ
- 88 F : ちょっと
- 89 M : 食べてないな, とか
- 90 F : 食べてあったかと思ったじゃん
- 91 M : だ-ふつうは見て
- 92 F : な, 見たってわかんないじゃん
- 93 M : 俺だってわかってるじゃん. ちゃんと
- 94 F : あんたがだから
- 95 M : 俺ゆったじゃん ね? 「食べてないよ ね?」って
- 96 R : @@@@
- 97 F : え, ちが, あてずっぽうだったよ
- 98 M : それが気遣いだよ

FはMに対して気持ち悪いといい、Fは気遣いができないとのMの批判にも、反論を行っていく。しかし、MはRに対して再び「ね」を多用することで、Rにフッティングを合わせて、Fを再び批判し、自分は気遣いができるとしている。

ここで、ゴフマンのいう表敬 (deference) と品行 (demeaner) (Goffman, 1967) の観点から、Mの行っていることをつぎのように解釈できる。Mは日本の私立大学ではトップレベルに属するW大学の出身であり、高学歴とされる集団に属し、弁護士をめざしている。高学歴や弁護士という職業は、伊藤 (1993, 1996) が「男らしさ」であるとする「優越、権力、所有」

につながるものである<sup>17</sup>。また、この食事会のやりとりの際立った特徴は、これまでみてきたとおり、Mが「人気者」や「異性」、「気遣い」などの概念を用いて、参加者の（とくに、ジェンダーに関する）フットィングの変化の主導権を握っている、あるいは、握ろうとしている点にあり、その点でも、Mは「優越、権力、所有」につながる「男らしさ」を志向していると考えられる。一方、Mが自分は高学歴集団の中では、下である（以上のような意味での「男らしさ」が足りない）との認識をもっていることも、やりとりからわかっている<sup>18</sup>。そうした特徴をもつMは、Rに対してはフットィングを合わせたり、終助詞「ね」を使用したりすることで、表敬を示すと同時に、自分は気遣いができることを示すことで、自分がきちんとした人間であることをも示している（品行）といえる。Mはそうすることで、Fに対して優位に立つことによって、自らの（前述の意味での）「男らしさ」のなさを補完していると解釈できる。

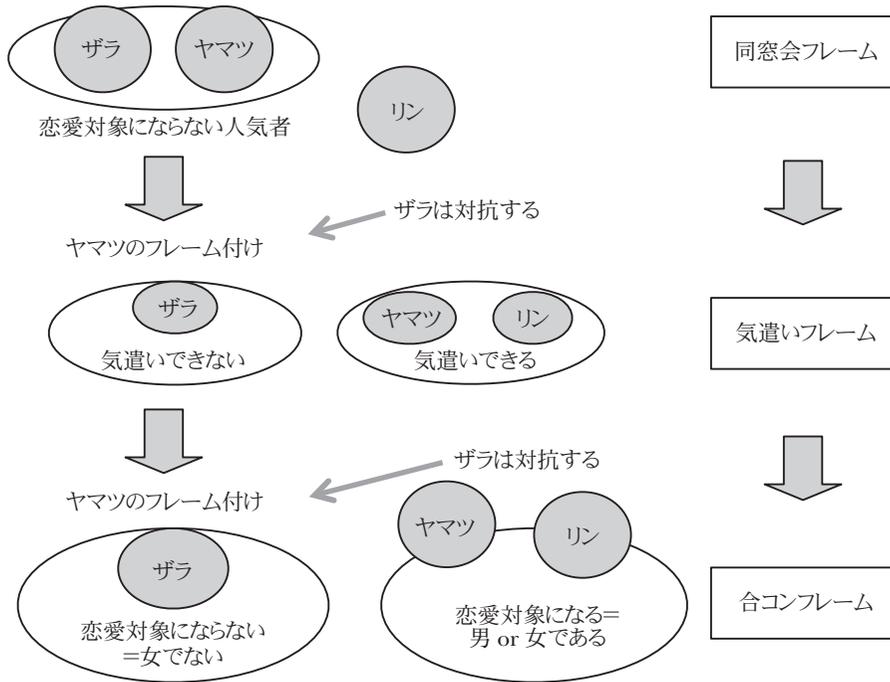
以上で述べてきたような、Mがもっていると考えられる、フットィングの変化に関する主導権への志向（フレーム付けへの志向）、参加者のあいだに明瞭な上下関係を構築することへの志向、「優越、権力、所有」につながる「男らしさ」への志向が、最終的には恋愛対象となる異性、男性として自らを指し示す行為につながっていると考えられる。そして、それはMが98行目で「それが気遣いだよ」と気遣いの文化的意味範疇を決定し、定義付けを行うことができる優位な立場、また、そうした気遣いを参照軸として、FとRが女性であるかないかというフットィングの振り分けを行える立場、すなわち、ジェンダー・カテゴリーを判断できる優位な立場に自らを位置づけることにもつながっていると考えられる。

#### 4. フットィングとフレームの推移

以上で分析してきた、フットィングとフレームの推移をまとめれば、つぎのようになるだろう。抜粋①の場面では、MとFは二人とも「人気者＝恋愛対象ではない」という点で共通していることが指し示されていた。しかしながら、やりとりが進むにつれて、MはFを気遣いができない＝女性ではない、とする一方で、Rには連帯感を生み出す「ね」を用い、MとRを「俺ら」と一括りにすることで、Fとは距離を取り、Rとの距離を近づけるようなフットィングをとるようになる。MはRに対しては、女性（＝気遣いができる、あまり食べない）としてのフットィングを、Fに対しては、女性でないもの（＝気遣いができない、よく食べる）としてのフットィングをとらせようとする行為に従事しているということである。そうして、最終的には、MはFに対してM自身のことを「異性として」明示的に言及し、人気者ではなく、恋愛対象として指し示すという行為に至る。こうして、当初は「人気者」として、同一集団に属していたはずのMとFは、「人気者」と「恋愛対象」の別集団に属するものへと分離される。そして、Mは自らを、恋愛対象となる男としてのフットィングをFに示しながらも、Fのことは恋愛対象となる女としてのフットィングはとらせないようにする（Rには恋愛対象としての女のフットィングをとらせようとする）行為を行っていることになる<sup>19</sup>。

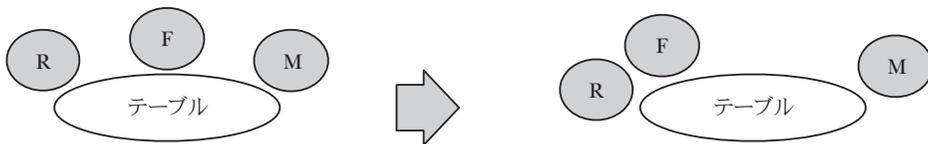
そのやりとりの推移を、図にまとめるとつぎのようになるだろう<sup>20</sup>。当初は、ザラ（F）とヤマツ（M）を恋愛対象にならない人気者として、同一集団に属させる「同窓会フレーム」（と名付ける）のなかでやりとりが行われていた。それが、徐々に、気遣いができる人とできない人とに評価付けを行う「気遣いフレーム」（と名付ける）へと移行し、最終的には、恋愛対象になる人と恋愛対象にならない人を気遣いとの関連で区分けする「合コンフレーム」（と名付ける）へと移行した。それは、相互行為のなかで、気遣いとジェンダーとの関係が構築されていくプロセス、

すなわち、気遣いの文化的意味範疇が構築されると同時に、ジェンダー・カテゴリーが権力構造によって生産されていくプロセスを示すやりとりであったともいえる。



140

そして、こうしたフットィングとフレームの推移を類比的に示す、非言語的な特徴も観察された。それは、以下の図に示すように、食事会が始まった当初は、M、F、Rの3名の身体的距離がほぼ等間隔であったが、食事会が終了した時点では、FとMの身体的距離がかなり拡大していたということである。



### 5. おわりに

本稿では、食事場面におけるミクロな相互行為に着目し、気遣いとジェンダーとの関係性がやりとりのなかで構築されていく過程を明らかにすることを試みた。「気遣い」、「人気者」、「恋愛対象」、「女性」、「男性」などの文化的意味範疇が反復して示され、また、人間関係の構築に大きく寄与する終助詞「ね」、ダイクシス「俺ら」、呼称「～ちゃん」の使用がなされることで、参加者のフットィングとフレームが大きく変容していく過程が明らかとなった。そして、気遣いを参照軸とした「気遣いフレーム」への移行によって、同一集団に属していた人が別集団へと分離され、女性であるかないかというジェンダー区分（ジェンダー・カテゴリー）にもつながっていくプロセスが示された。本稿の事例は、人びとの気遣いに関する意識、そして、意識的・無意識的

な行為がかなり見えやすいかたちで表れるような状況で行われたもので、もっとも極端な事例であると考えられる。しかしながら、日常の行為においても、より緩やかなかたちで、同じような状況が起こることは考えられる。

「気遣い」や「人気者」、「恋愛対象」、「女性」、「男性」などの文化的意味範疇、そして、気遣いとジェンダーとの関係性といったものは、本稿で分析したようなミクロな相互行為のなかから構築されていくものであり、そうしたやりとりの歴史のなかで構築されてきたものである。気遣いとジェンダーの関係性は、近代になってから、とくに、1960年代以降の高度成長期以降に顕著になってきた事象であり、歴史的な変容を被っているため、そうした歴史的分析を含めた、より精緻な議論を今後の課題としたい。

## 註

- 1 ジェンダーは、生物学的性 (sex) とは区別される、社会的・心理的性をさす。
- 2 このような指摘がなされれば、気遣いとジェンダーの関係に気づく人は多いだろう。じっさい、気遣いができない男性よりも、気遣いができない女性に対して加えられる社会的制裁のほうがはるかに大きいことは、日本社会を少しでも観察してみれば、容易に見てとれることである。しかしながら、日本社会においては、あまりにも当たり前すぎるがゆえに、かえって見過ごされてきた事象なのではないかと思われる。それに加え、近代化にともなって、「公」と「私」の分離が起き、男性は公領域に女性は私領域へと疎外され、長いあいだ、女性の存在する場所 (私領域) が学問の対象として考えるに値しないとされてきたことも、ジェンダーと気遣いとの関連性の研究がなされていない背景にあると考えられる。
- 3 以上で指摘されているような、気遣いとジェンダーとの関係性は、近代になって現れてきたものであり、とくに、1960年代以降、すなわち、日本の高度経済成長期以降に顕著に観察されるようになってきたものである。詳しくは、瀬端 (2011) を参照されたい。
- 4 意味は、大きく分けて、言及指示の意味と社会指標の意味に分けられる。前者は何が言われているかに関する意味であり、後者は何がなされているかに関する意味である。「私はリンゴが好き」と「ぼく、リンゴ、しゅぎ」では、言われていること (言及指示の意味) は同じでも、明らかに、なされていること (社会指標の意味) は異なり、話者の社会的属性 (大人、子ども、など) に関する異なる意味が示される。
- 5 以上の記述は、ネイティブには認識論的限界があるが、外国人研究者にはそれが無いという主張ではない。人は誰も認識論的限界をもち、それがそれぞれ異なることを説明したものである。また、語彙 (*kula*, *taboo*, *amae*, *ki* など) への注目は、人類学的「文化言説」に典型的に見られるもので、そうした言説の特徴は、それらの語彙に文化の本質的特徴を見いだす点にある、ということも付け加えておく。
- 6 「日本人」ということばは、日本人すべてを一括りにする発想から用いているのではもちろんない。気遣いの調査に関して、日本人によるジェンダーの視点からの研究はないが、外国人研究者による気遣いとジェンダーの関連の研究はなされている、といったような傾向的差異を示すため、括弧付きで用いている。
- 7 調査者が分析データに含まれていることに関して、不適切と考える向きもあると思われるが、人類学等のフィールドワークにおいては、調査者が現場に影響を与えないことは不可能であり、むしろ、調査者が現場に与える影響を考慮に入れたうえで、分析を行うことが必要とされる (佐藤, 2006, p.275)。ここでは調査者が会話に入ることによって、参加者の「気遣い」に対する意識化の度合いが極大化された状況となっていると考えられる。したがって、人びとの気遣いに関する意識、イデオロギー性が見えやすいかたちで表れるようになっている場面である。そのような状況は、日常生活においても考えられるものである。たとえば、気遣いやマナーについてコンサルティングを行う会社の女性の社長が、平社員と飲みに行くという状況があると仮定する。そこでは、女性の社長は気遣いのエキスパートとみなされており、平社員は気遣いをかなり意識せざるをえないような状況に追い

- 込まれることとなる。そのような状況と類似した状況が作られることで、人びとの気遣いに対する意識が非常に見えやすいかたちで表れているのが、本調査の状況である。
- 8 トランスクリプトにおける「@」は、DuBois(2006)にならい、笑いを示す。
- 9 中世ヨーロッパの宮廷・騎士社会に端を発するといわれる「恋愛」は、近代以前は結婚外で成立するものだったが、近代社会になり、愛と性と結婚と子どもを一連の過程として結びつける発想（ロマンティックラブ・イデオロギー）が生まれた（井上, 1966; 千田, 2011）。
- 10 対照ペアとは、「昔々あるところにおじいさんとおばあさんがいました。おじいさんは山へ柴刈りに、おばあさんは川へ洗濯に行きました」といった文章における、「おじいさん／おばあさん」や「山／川」、「柴刈り／洗濯」などの対照をなすもので、出来事のテキスト化に貢献するものである。
- 11 Mは他の箇所でも「人気はとるけど、異性はとれない」と何度も発言している。
- 12 Rは旅行後、初めてFに会ったために土産を渡し、同席したMにも渡した。Rはここで、二人に土産を渡す行為が、食事会の相互行為テキスト生成に何らかのかたちで関与することは考慮に入れていたが、あとに説明するような帰結になるとまでは予想していなかった。
- 13 上述のように、終助詞「ね」の使用の際、Mは視線をRに向けており、終助詞「ね」がRに向けられたものであり、Rとの連帯感を高めるものであることが指し示されている。
- 14 Jakobson(1960)はコミュニケーションを構成する6要素(context, addresser, addressee, contact, code, message)を同定し、それぞれに対応する6機能(referential, emotive, conative, phatic, metalingual, poetic)を提示した(pp.353-358)。
- 15 以上のやりとりに関して、FとMの「親密性」(同一集団への帰属)を示す、一種の「遊び」の文脈におけるコミュニケーション(「からかいあい」)だと思われる可能性もある。しかし、江原(1985)が「親密性」に関わる「からかい」の分析において考察しているように、それが「からかいあい」なのか、それとも、攻撃や批判、制裁などの意図を包み隠すために利用される「からかい」なのか、が問題である。明瞭な上下関係がある場合、遊びの文脈にあるからかいは攻撃性を隠すために利用されやすい。MとFは高校の仲間グループでたまに会う程度の「同級生」であるが、この食事会のやりとりの際立った特徴は、Mが参加者のフットイングの変化の主導権を握っている、あるいは、握ろうとしている点にある。つまり、参加者のあいだで明瞭な上下関係を構築しようとしているのがMであり、その点において、このやりとりが攻撃性を隠すための「からかい」と解釈される可能性は高い。そして、『『からかい』が「遊び」である以上、それに対して、実際上の反撃を加えることは、社会規範によって抑制されている(p.183)』ということが、事態をより一層複雑にする。からかわれている側が反撃をしていないからといって、それが「からかいあい」だとは言えないのである。また、当初は「恋愛」の様相を呈していたやりとりが、上下関係のある人びとのあいだでは「セクハラ」へと容易に転化することがあるように(牟田, 2013)、人びとが出来事に与える解釈も、時と場合により、変わりうる。本稿で言えることは、MとFがその場では、表面上、遊びの文脈における「からかいあい」をしていたように解釈できる可能性も排除はできないというだけであり、それを「からかいあい」であると断定することはできない。じっさい、Fはのちの回顧インタビューにおいて、この食事会に関して「ムカついたことした思い浮かばない」と述べている。
- 16 面白い女性が恋愛対象になりにくいことに関する考察が、小倉(2007, pp.160-167)においてなされている。本稿が対象としたやりとりのなかでは、「男性も女性もお笑い系は恋愛対象にならない」という趣旨の発話がMによってなされていることは注目に値するだろう。
- 17 職業の社会階層としては、大学教員、弁護士、医師、会社員、運送業、農業などのさまざまなものが考えられ、高学歴の人でも、そのジェンダーや文系／理系、出身家庭の環境などによって、異なる志向をもつと考えられる。「男らしさ」と「優越、権力、所有」との結びつきも、「女らしさ」と「気遣い」との結びつきも、必然的なものでは決してない。以上のやりとりにおいては、Mが以上の二つの結びつき、また、その二つと「恋愛対象になること」との結びつきを前提として振る舞っていることに特徴がある。片岡(2003)は、日本における男性と女性の経済資本と文化資本の再生産に関して、ジェンダー化がなされていることを論じている。気遣いは、そこで述べられている女性の文化資本の一つとして、機能しているとも考えられるが、そのことに関しては稿を改めて論じたい。
- 18 つぎのようなやりとりがなされている。
- F：橋下弁護士めざしてるんでしょ？  
R：[@@@@@  
M：[いや、ありゃだめだよ  
F： [橋下弁護士とさ  
R： [@@@@@

- M: 橋下弁護士ってバラエティ系でしょ？  
 F: うん  
 M: 俺はバラエティじゃないもん  
 F: なに〇〇〇〇系？（協力者からの要請により〇で伏せている）  
 R: @@@@  
 F: つーか、なんでテレビでデビューしようと思ってんの、そんな。え、橋本弁護士と同じ学部？それとも [誰？]  
 M: [違う。橋下さんのが上。学部的には、俺、下の学部だもん]  
 F: 何学部？  
 M: え、い、[ゆいたくない]  
 F: [なんで言わないのよ@@なんで@@]
- 19 そうすることで、自らが人を女性であるかどうかを承認できる立場、すなわち、伊藤（1993, 1996）が男らしさであるとする「優越、所有、権力」の立場にあることを指し示しているとも考えられ、「男であること」と「女であること」の実践に関する非対称性を示しているともいえる。
- 20 既述のように、フットイングやフレーム、コンテクストは、一瞬一瞬、刻々と変化しているものであり、図に示したような完全に線状的な仕方、それらが推移しているということを意味しているのではもちろんない。以上の図は、行きつ戻りつしながらも、全体として、どのような方向へとフレームやフットイングが推移しているかを示したものである。

#### 引用文献

- Borovoy, A. B. (2005). *The too-good wife: Alcohol, codependency and the politics of nurturance in postwar Japan*. Berkeley, CA: University of California Press.
- バトラー, J. (1999). 『ジェンダー・トラブル：フェミニズムとアイデンティティの攪乱』(竹村和子・訳) [原著：Butler, J. (1990). *Gender trouble: Feminism and the subversions of identity*. New York: Routledge.]
- Du Bois, J. W. (2006). Transcription symbols by delicacy: Levels 1-4. 2012年5月18日 <http://www.linguistics.ucsb.edu/projects/transcription/A02bsymbols.pdf> より情報取得.
- 江原由美子 (1985). 「からかいの政治学」『女性解放という思想』(172 - 194頁). 勁草書房.
- Goffman, E. (1967). *Interaction ritual*. New York: Pantheon Books.
- Goffman, E. (1981). Footing. In *Forms of talk* (pp.124-159). Philadelphia, PA: University of Pennsylvania Press.
- Goffman, E. (1986 [1974]). *Frame analysis*. Boston: Northeastern University Press.
- Gumperz, J. J. (1982). *Discourse strategies*. New York: Cambridge University Press.
- Goodwin, C., & Duranti, A. (1992). Rethinking context: An introduction. In A. Duranti and C. Goodwin (Eds.), *Rethinking context* (pp.1-42). Cambridge: Cambridge University Press.
- 井上俊 (1966). 「恋愛結婚の誕生」『ソシオロジ』第12巻, 第4号, 77-99頁.
- 伊藤公雄 (1993). 『男らしさのゆくえ』新曜社.
- 伊藤公雄 (1996). 『男性学入門』作品社.
- Jakobson, R. (1960). Closing statement: Linguistics and poetics. In T. A. Sebeok (Ed.), *Style in language* (pp.350-377). Cambridge, MA: MIT Press.
- 片岡栄美 (2003). 『『大衆文化社会』の文化的再生産：階層再生産、文化的再生産とジェンダー構造のリンクージ』宮島喬・石井洋二郎 (編)『文化の権力：反射するブルデュー』(101-135頁) 藤原書店.
- Koyama, W. (1997). Desemanticizing pragmatics. *Journal of Pragmatics*, 28, 1-28.
- 小山亘 (2008). 『記号の系譜』三元社.
- 小山亘 (2011). 『近代言語イデオロギー論』三元社.
- 小山亘 (2012). 『コミュニケーション論へのまなざし』三元社.
- Kroskrity, P. V. (2000). Regimenting languages: Language ideological perspectives. In P. V. Kroskrity (Ed.), *Regimes of language: Ideologies, politics and identities* (pp.1-34). Santa Fe, NM: School of American Research Press.
- 水島広子 (2012). 『誰と会っても疲れない「気づかい」のコツ』日本実業出版社.

- 小倉千加子 (2007[2003]). 『結婚の条件』 朝日新聞社.
- 牟田和恵 (2013). 『部長、その恋愛はセクハラです』 集英社.
- Rosenberger, N. R. (1992). Tree in summer, tree in winter: Movement of self in Japan. In N. R. Rosenberger (Ed.), *Japanese sense of self* (pp.67-92). Cambridge: Cambridge University Press.
- Rosenberger, N. R. (1994). Indexing hierarchy through Japanese gender relations. In J. M. Bachnik & C. J. Quinn, Jr (Eds.), *Inside and outside in Japanese self, society, and language* (pp.88-112). Princeton, NJ: Princeton University Press.
- 佐藤郁哉 (2006). 『フィールドワーク 増補版』 新曜社.
- 瀬端睦 (2011). 『気遣い』と敬語の系譜 『異文化コミュニケーション論集』 第9号, 115-127頁. 立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科.
- 千田有紀 (2009). 『女性学／男性学』 岩波書店.
- 千田有紀 (2011). 『日本型近代家族の誕生』 勁草書房.
- Silverstein, M. (1976). Shifters, linguistic categories, and cultural description. In K. H. Basso & H. A. Selby (Eds.), *Meaning in anthropology* (pp.11-55). Albuquerque, NM: University of New Mexico.
- Silverstein, M. (1987). Cognitive implications of a referential hierarchy. In M. Hickman (Ed.), *Social and functional approaches to language and thought* (pp.125-164). Orland: FL, Academic Press.
- Silverstein, M. (2001[1981]). The limits of awareness. In A. Duranti (Ed.), *Linguistic anthropology: A reader* (pp.382-401). Malden, MA: Blackwell.
- シルヴァスティン, M. (2011). 「知識とコミュニケーションの弁証法」(榎本剛志・永井那和・訳) 『異文化コミュニケーション学への招待』 (288-330頁). みすず書房. [原著: Silverstein, M. (2007). How knowledge begets communication begets knowledge: Textuality and contextuality in knowing and learning. 『異文化コミュニケーション論集』 第5号, 31-60頁.]
- 上田比呂志 (2011). 『日本人にしかできない「気づかい」の習慣』 クロスメディア・パブリッシング.
- 上野千鶴子 (2010). 『女ぎらい』 紀伊国屋書店.